様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月２１日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005～2008
課題番号：17520481
研究課題名（和文）　地方志及び碑記史料の解析を主とした宋～清の中国東南沿海地方における地域性と歴史性
研究課題名（英文）　Regional and historical characteristics of Southeast coastal area during the Song-Qing China from the analysis of local gazetteers and stone inscriptions as primary historical materials

研究代表者
須江　隆（SUE TAKASHI）
日本大学・生物資源科学部・准教授
研究者番号：90297797

研究成果の概要：本研究では、宋～清の中国東南沿海地方における地方志･碑記の系統的史料分類作業を継続し、該地の地域史研究の基盤を整備した。また地方志･碑記に関する史料論的研究を深化させることにより、該地の地域性の一部が解明された。更に当該研究の現状と課題を明確化させ、地方志･碑記史料の解析･活用法についても知見を呈示できた。かかる成果は海外にも積極的に発信され、国際的学術交流のためのネットワークが飛躍的に拡大した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	900,000	0	900,000
２００６年度	900,000	0	900,000
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総　計	3,400,000	480,000	3,880,000

研究分野：中国近世地域史料論、地誌・石刻史料解析、中国近世地域社会史
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：地方志、碑記、史料論、中国近世地域史、中国東南沿海地方、国際情報交換

１．研究開始当初の背景

本研究課題の申請時における当初の背景･動機は、以下の５点に集約される。

(1) 近年経済的発展めざましい中国東南沿海地方は、中国及び東アジア海域で、如何なる地域性・歴史性を具有して現在に至っているのであろうか。その手掛かりを現代の我々に提供し、かつ各時代の地域の特色を最も如実に物語ってくれるのが、地方志及び石に刻まれた碑記である。中国では古来より、一地方の地理について書かれた方志が作られてきたが、唐代までは地図を中心とした所謂地方図経の作成が主流であった。豊富な具体的記述内容をもち、地方史的性格を強く帯びた地方志が州県レベルで盛んに編纂・版刻されるようになるのは、北宋末期以降であり、その傾向は明清時代に至り一層顕著となる。かかる地方への関心の高まりは、地域社会の成熟を背景としていたが、地域における祠廟･寺院･学校･社会救済･橋梁･水利等々に関わる諸文化･事業の進展は､碑記としてその具体的内容が石に刻まれ、永久的に記録として地域に残されることにもなったのである。従って、当該地方のかかる残存史料を、宋を基点としつつ、清までをも射程に入れて網羅的に調査･整理した上で､叙述内容に解析を施すことは、当該地方の地域性･歴史性を浮彫にするために極めて有効な手段であるといえる。

(2) 本研究は、従来の中国史研究では解明が不十分であった基層社会の論理を如実に物語る地方志･碑記史料に着目し、それらを皆尽

的･系統的に調査･整理した上で、叙述･刻印された過程･目的をも踏まえた解析法で分析し、中国東南沿海地方の歴史性を解明しようとするものである。ところが、皆尽的･系統的研究手法に加え、史料論的視点をも視野に入れた研究は、内外にわたって当該史料の利用頻度の高さの割には極めて乏しい情況にある。

(3) また本研究は、地方志・碑記史料を断代的かつ部分的に分析するのではなく、それら史料が宋代以降に豊富な記述内容を伴ってくる点や、何度も重修されていったという特質を生かし、長期的かつ皆尽的に調査･分析を行い、系統的整理を試みようとするものである。従って、地方志･碑記の史料性が明らかにされるのみならず、中国東南沿海地方のどの地域に、如何なる史料が、どれだけ残されたのかが解明され、当該地方の近世中国における地域性･歴史性も抽出される見込みである。

(4) 本研究は、近年の中国地域史研究の進展にともない、利用頻度が高まった地方志･碑記の網羅的･体系的研究実現のために企画された。従ってこの研究が行われることにより、当該史料を部分的にのみ利用し、ケース･スタディーの枠内に止まっている地域史研究を、より巨視的な観点から地域を捉えるという新次元へ押し上げることになり、浙江･福建等の東南沿海地方が、近世中国･東アジア海域に果たした役割についても解明されることになる。

(5) 地方志･碑記の分析手法をめぐっては、内外において活発な議論が存在していない。従って、新たな方法論を国内のみならず、海外へも積極的に発信し、海外研究協力者とも密に討論を展開していく必要もある。

２．研究の目的

本研究は、宋～清の中国東南沿海地方における地域性･歴史性を解明するために、地方志･碑記の皆尽調査と系統的分析、史料論的解析を行い、当該地方の基礎史料の構築を目指す。具体的な目的は、次の４つである。

(1) 浙江･福建の地方志について、残存情況と内容を目録や地方志の目次等を用いて皆尽的に調査し、行政区画ごとに系統的に整理する。地方志の序文等を参照し、作成された痕跡が確認できるものも加えていく。

(2) 当該地方の碑記については、「石刻史料新編」などの諸史料や目録、地方志の該当項目で網羅的に調査し、時代･地域ごとの碑記の残存状況を、祠廟･学校等の分類項目を設定して整理する。歴史遺産として現存する碑記については、原碑･拓本･録文等を参照し、碑刻された内容･文字の異同等について調査を行う。

(3) 地方志に関しては特に序文の精読に、碑記に関しては生成現場における目的意識の刻印の解析に努め、何れも清朝考証学者の史料論的研究成果を消化しつつ、個々の史料の性質を生成論的に解明し、地域性を探っていく。

(4) 上記(1)～(3)で得られた研究成果は、積極的に中文や英文で海外にも発信し、中国近世における地方志･碑記史料研究や地域史研究をめぐる国際的学術交流に貢献をする。

３．研究の方法

本研究は、研究代表者一人によって、以下の方法で、４年次計画で遂行された。

(1) 平成 17 年度:研究全体の準備期間にあて、基礎史料の蒐集と整理を集中的に行う。

① 研究に不可欠な地方志については、「宋元地方志叢刊」「中国地方志集成(浙江府県志輯)(郷鎮志専輯)」等の基本的現有設備を、嘗て受領した「科学研究費補助金」によって、研究代表者の本務校に完備することができた。従って、本研究の遂行に当たっても、それらを中心に皆尽的に調査し、どのような内容･項目によって構成される、如何なる地方志が作成されたのか、あるいは残存しているのかを、府･州･県･鎮･郷ごとに分類し、系統的整理を行う。但し福建省関連の地方志が欠けているので、「中国地方志集成 (福建府県志輯)」を新規購入し、上記作業を集中的に行う。

② 碑記については、宋代の祠廟の記録に関しては、蒐集･整理済みの史料が多いが、他の時代･項目の関連史料については、未蒐集･未整理の部分があるので、「石刻史料新編」等の現有設備を中心として、各種文集類や地方志所収の関連項目にあたり、どのような事柄を刻んだ碑記が作られ、残存しているのかを、碑記の項目･種類ごとに皆尽的に調査し、それら史料の蒐集･整理を行う。また、上記①と同様に、それらの史料を各地方行政区画ごとに分類し、同じ対象物について異なる時代に刻まれた碑記については、系統的に整理する。

③ 宋代以降の地方志･碑記に関する史料論的分析については、清朝考証学者の研究成果を、各人の文集などに当たって蒐集･読解し、研究史整理の一環として消化していく。

④ 研究上必要となる目録や関連専門書の整備を行う一方で、史料蒐集や内容確認のため、国内の研究諸機関において調査をする。

⑤ 本研究では、複数の国際会議の場で、地方志･碑記の解析を主とした史料論に関するパネルを、内外の研究協力者とともに構成し、成果を公表することを視野に入れている。従って、研究代表者は、内外の研究協力者と密に連絡を取り合い、研究内容の打合せを頻繁に行い、互いの作業を確認し合うことが不可欠である。そのため、内外の研究者との連絡体制を整え、場合によっては海外研究協力者を招聘の上、研究集会を開催する。

(2) 平成 18 年度:前年度までの基礎的研究作業を継続する。
① 基本的に前年度①②③④⑤の作業を継続するが、特に⑤の作業を重視し、本年度末以降の国際会議でのパネルの中身を深化させる。
② 基礎的作業領域での研究の成果は、段階的に国内の学会等で公にする他、ボストンで開催される第 59 回米国アジア研究学会年次総会で国際的パネルを組織し成果を公表する。

(3) 平成 19 年度 : 2 年間の基礎的研究作業の完了を目指し、それらの成果を用いて解析を主とした発展的研究へと飛躍させる。
① 基礎的研究作業についての点検を行い、不足部分や問題点を指摘し、未収集・未整理の箇所についても補完する。
② 前年度までの基礎的研究を踏まえ、地方志については、系統的分析に加え、序跋文等を中心とした史料論的解析を主として行う。
③ ここまでの成果は、アンカラで開催の第 38 回国際アジア・北アフリカ研究会議で、海外研究協力者と共に、地方志・碑記の解析を主とする史料論関連のパネルを組織し公表する。

(4) 平成 20 年度 : 発展的研究作業の完成と 4 年次にわたる研究成果の総合化をはかる。
① 前年度②の作業を継続的に行い、「宋～清の中国東南部における地方志・碑記の皆尽調査と系統的分析、史料論的解析に関する研究」の実現に向けて成果を総合化する。
② 本研究の意義や将来的ビジョンを、異分野の領域との連携を強化し、シンポジウムの場などを利用して明確化していく。
③ 4 年次にわたり行われた本研究の全成果は、報告書を作成して提出する。

４．研究成果
(1) 研究の主な成果
①地方志・碑記の系統的史料分類作業の進展
地方志については、「中国地方志集成（浙江府県志輯）」等の基本的現有設備に加え、「中国地方志集成(福建府県志輯)」を新規購入し、それらに関する皆尽的調査に着手した。どのような内容・項目によって構成された、如何なる地方志が作成され、残存しているのかを、府・州・県・鎮・郷レベルごとに分類の上、系統的整理を行う作業を継続した。
碑記については、「石刻史料新編」等の現有設備に加え、「宋集珍本叢刊」などを購入し、それらを中心として、どのような事柄を刻んだ碑記が作られ、残存しているのかを、項目・種類ごとに皆尽的に調査し、それら史料の蒐集・整理を行う作業に着手した。また蒐集済み史料を地方行政区画ごとに分類し、同じ対象物について異なる時代に刻まれた碑記については、系統的に整理するとともに、清朝考証学者の録文採録状況についても調査した。
特に 4 年間の研究期間に於いては、東北大学などの国内研究諸機関にて、蘇州府や紹興府、寧波府関連の地方志を重点的かつ系統的に調査し、各時代に編纂された地方志の序跋文の蒐集・読解・訳注稿作成作業、及び関連する清朝考証学者の研究成果の吸収に努め、後掲の成果が公表された。また該地方の碑記についても、地方志・録文集等から抽出し、拓本の残存状況や、碑記が後世の地方志や録文集にどのように記録されていったのかを探った。
最終的に、蘇州府・紹興府・寧波府に関する成果を総合化させ、「宋～清の中国東南部における地方志・碑記史料の皆尽調査と系統的分析、史料論的解析に関する研究」の実現に向けた基盤が形成された。
②地方志・碑記に関する史料論的研究の深化と地域性の解明
宋代以降に地方志の編纂が顕著になっていく背景を探るために、「呉郡圖經續記」に関する史料論的分析を行った。著者の自序や、それ以降の序跋文を蒐集・読解し、著者朱長文の各種伝記史料等も徹底的に分析した。「呉郡圖經續記」は、北宋時代に編纂された蘇州の地方志として、極めて貴重であるが、希少価値がある割には、その史料性に関する検討が不充分であった。11 世紀後半に、何のためにかかる書物が編纂されたのか、この課題に真摯に向き合うことにより、11 世紀後半から南宋にかけて、さらには元・明・清と時代が降るにつれて、多くの地方志が編纂・出版されることになった背景を探る糸口が呈示された。
また、従来の研究で地方志と碑文の史料性や関連性に明言するものは皆無に等しかった。そこで事例研究として、紹興府城隍廟に関する史料群の分析を通じ、碑文・地方志・石刻書の記述の特徴を探り、各史料の関連性を解明した。従来判然としなかった該地の地方志の叙述と碑文との連関性が明らかとなり、当該史料の特質や該地の地域性解明に結実し得る成果を生み出した。
更に、現存する寧波の最古の地方志、乾道『四明圖經』の史料性に着目し、本書にはかなり以前から繰り返し記録されてきた言説が含まれていることを発見した。その上で、それらの言説を抽出して、その内容や後の記録の有り様を検討し、以下の知見が得られた。
1) 舟行の安全や海難事故をめぐる言説や、水難を引き起こすと言われる蛟に関する信仰が長期に亘り伝承されてきた。これらは明らかに寧波の地域性を反映している。
2) 漢王朝を再興した光武帝や東晋王朝の下で功績をあげ、劉宋王朝を開いた劉裕に関する言説が、千年以上も伝承され、土地の人々の中に浸透していた。これらの言説は、地方志や碑文に記録され、また各時代の人々の話題とされ、論議の対象となることもあった。
3) 地方志は、土地の記憶を次なる時代に伝

承させていく上で、大きな役割を果たしていたが、それ以上に碑文が地方志の著者や土地の人々に非常に大きな影響を及ぼしていた。
4)　碑文や地方志に刻印された言説が、土地の人々に受容され、彼等の心性や信仰、記憶をかえていく力を有していたとするならば、碑文や地方志が、一面では寧波の地域性や歴史性を築き上げてきたという指摘もできる。

③当該研究の現状と課題の明確化

地方志･碑記を駆使した従来の内外の研究の歴史と現状を整理し、宋代以降の地域史料研究の課題や可能性を明確にした。その成果は、国内の研究集会で口頭発表された他、中文及び英文に訳された論文が、それぞれ近々に公刊される。

また宋代石刻研究の現状と可能性を整理し、前後の時代や他のフィールドを研究対象とする石刻研究者と、複数のシンポジウム等で議論を重ねることにより、今後の日本の宋代石刻研究に関わる下記の課題が明確となった。
1)　史料環境の変化や石刻活用の利便化に相応する研究手法を模索する必要性がある。
2)　唐代史や元代史研究者が着手しつつあるように、宋代石刻類についても、皆尽的調査･整理に加え、活用しやすい目録や索引、検索ツールの整備が不可欠である。これに関連して、唐代や元代の石刻と宋代のそれとを比較した場合に､時代的･地域的な石刻残存量の違い、石刻の中味や史料性の相違があるはずである。今後益々時代横断的な石刻研究を進展させていく必要もある。
3)　石刻書･地方志に掲載の録文は､碑陰や刻字した人名等の省略が少なくなく、誤りも多い。利用には慎重を要するが、石刻書の性格を吟味したり、記録者が紙媒体の書物に写した意図や関心を探ったり、省略や誤りが多いことの意味付けを行うことも重要である。
4)　石刻文の断片的利用は、史料としての価値が減退してしまうし､撰者や刻石･立碑した者の意図が正確に読み取れない。碑陰や題名に着目するのは勿論として、刻字の大きさや字体に至るまでも吟味し、できる限りオリジナルな材料で利用すべきである。
5)　文集や地方志等に輯録された石刻を活用する場合には、録文･拓本･原碑との比較、真偽の検討が不可欠なので、自ら録文を集成したり、宋～清の金石学の成果を利用したりすべきである。また膨大な碑文を紙媒体に載録した意味を考察することも必要である。
6)　石刻をモノとして把握することは重要である。近年の台湾の宋代墓誌銘研究は、かなり進展しており、物質的形状や製作過程中の要素等も加味された研究がなされつつある。
7)　石刻を見る側の視点、石刻の空間的意味付けという視点も今後は導入する必要がある。
8)　改革開放政策による自由化で、新史料の出現､拓本･原碑の利用が可能になりつつある。但し中国･台湾の研究者とその他の国の研究者との有利･不利は当然考えられる｡欧米の石刻研究の視点も加味しつつ、日本独自の石刻研究の特色をアピールしていく必要がある。

④地方志･碑記史料解析･活用法の呈示

地方志については、特に記述の連続性や位置付けを考え、ある事柄に関する記述を、後に当地で編纂された複数の地方志で博捜することにより、千年以上もの該地の歴史的諸相を解明しうる可能性があることを明らかにした。また碑記については、上記③1)～8)の記述と重複するので省略する。

⑤研究成果の海外発信による国際情報交換

第59回米国アジア研究学会年次総会、第38回国際アジア･北アフリカ研究会議でパネルを組織し、英語にて口頭発表をした他、複数の成果を英文及び中文で海外の学術雑誌等に公表した。また地方志の史料性に着目した英文論文の翻訳を行い、欧米圏における当該研究の最新成果を国内に紹介した。かかる活動を契機として、海外の研究者との学術的ネットワーク作りが飛躍的に進展した。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

①　本研究は、近年盛んになりつつある中国地域史研究に警鐘を鳴らすべく、史料性の吟味や緻密な分析手法の必要性を強調したものでもあった。従って本研究の成果は、今後地方志や碑記を活用する際には、必ず内外の研究者が参考に資すべき意義を有すると思わる。実際に、碑記を駆使して明代教育史の研究を行ったSarah Schneewind（カリフォルニア大学サンディエゴ校）等から自身の研究の見直しに関するコメントが寄せられた。
②　異分野領域との連携を意識し、本研究の意義や将来的ビジョンを、シンポジウムの場などを利用して明確化した。史料性に着目した国際研究集会や社会史研究法に関わる国際研究集会に参加して討論を行ったり、成果の一部を発表したりした。地方志の史料性を明確化し、今後の新たな社会史研究の可能性を呈示できた点は重要である。
③　最終年度末に、地方文献史料に関する大規模な国際シンポジウムを東京にて主催した。海外の研究者を複数交えたパネルを組織し、寧波府の地方志と碑記の記述的連関性と連続性に関する成果を公表した。上記②で言及した社会史研究の方法が実践され、その成果が海外の研究者にも発信されたこと、本研究で得られた人的ネットワークを活用し、英国･仏国･米国･台湾における新進の研究者の成果が国内に紹介できたことは、意義を有する。
④「地方志、石刻－日本宋代地域史料研究的現状与课题－」と題する研究史整理に関わる成果が、河南大学出版社刊の『日本宋史研究的现状与课题』に中文で、また米国のJournal

of Song-Yuan Studies にも英文で掲載されることが決定した。史料論的研究に秀でた我が国の宋代史研究の現状が、中国語圏のみならず、英語圏に発信されるのは、重要度が高い。

(3) 今後の展望

① 4年次にわたり行われた本研究の全成果は、本年度までの研究で十二分に着手できなかった地域、例えば浙江省内陸部や台州府・温州府、福建省の地方志・碑記に関する史料論的研究を加えて、将来的に著書のかたちで公刊し、大方からの批判を仰ぎたい。

② 地方志・碑記を主とする地域史料学を構築していくためには、基礎的な史料整備・分類作業が余りにも膨大に過ぎ、一研究者の力だけでは困難な状況にあることも痛感した。今後は、国内の地域史研究に携わる研究者のみならず、広く欧米の地域史研究者にも呼びかけ、国際的な共同研究として、中国近世地域史料学の構築の実現に向けて尽力したい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 17 件）

① SUE Takashi, Local Gazetteers and Stone Inscriptions: Current Conditions and Prospective Topics Regarding the Study of Song Regional History Materials, *Journal of Song-Yuan Studies*, vol.39, 印刷中, 2009, 査読有

② 須江　隆、地方志、石刻－日本宋代地域史料研究的現状与课题－、日本宋史研究的现状与课题(河南大学出版社)、印刷中、2009、査読有

③ 須江　隆、一个北宋文人的日常与生平－着重解析朱长文之墓表及墓志铭－、宋代文献资料学的新的可能性（河南大学出版社)、印刷中、2009、査読有

④ 須江　隆、宋代地誌序跋文考（二）－乾道『四明圖經』の史料性に関する二、三の考察－、人間科学研究、第 6 号、pp.36～61、2009、査読有

⑤ SUE Takashi, Revelations of a Missing Paragraph: Zhu Changwen (1039-1098) and the Compilation of Local Gazetteers in the Northern Song China, *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, vol.52, pp.57～84, 2009, 査読有

⑥ 須江　隆、Joseph Dennis「紹興府の地方志の歴史的価値」（翻訳)、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」文献資料研究部門主催 第 4 回国際シンポジウム「寧波とその周辺－地方文献に見える史料性・地域性・歴史性－」予稿集（東大教材出版)、pp.45～55、2009、査読無

⑦ 須江　隆、記録された言説と信仰－寧波の地方志と碑文を中心に－、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」文献資料研究部門主催 第 4 回国際シンポジウム「寧波とその周辺－地方文献に見える史料性・地域性・歴史性－」予稿集（東大教材出版)、pp.26～42、2009、査読無

⑧ 須江　隆、从祠庙记录看“地域”观、宋代社会的空间与交流（河南大学出版社)、pp.352～373、2008、査読有

⑨ 須江　隆、『呉郡圖經續記』の編纂と史料性－宋代の地方志に関する一考察－、東方学、第 116 輯、pp.109～126、2008、査読有

⑩ 須江　隆、ある北宋知識人の日常と生涯－朱長文に関する伝記史料の解析を中心に－、史叢、第 78 号、pp.58～73、2008、査読有

⑪ 須江　隆、宋～清時代の紙に写された碑文－紹興府城隍廟に関する史料群を中心に－、人間科学研究、第 5 号、pp.24～54、2008、査読有

⑫ SUE Takashi, Rocks copied on Papers during Song-Qing era: Why were Stone Inscriptions Recorded in Local Gazetteers?, *What Do Rocks and Papers Tell Us? : Building a New Theory of Chinese Local History Documents*, pp.24～62, 2007, 査読無

⑬ 須江　隆、宋代石刻の史料的特質と研究手法、唐代史研究、第 10 号、pp.27～46、2007、査読有

⑭ 須江　隆、中国近世地域史料研究の可能性、アジア遊学、第 100 号、pp.36～39、2007、査読無

⑮ 須江　隆、宋代地誌序跋文考（一）－北宋 朱長文『呉郡圖經續記』三巻 元豊七年（一〇八四）修－、人間科学研究、第 4 号、pp.18～35、2007、査読有

⑯ 須江　隆、刻石されなかった墓表の一節－米芾撰「朱長文墓表」－、アジア遊学、第 91 号、pp.115～125、2006、査読無

⑰ 須江　隆、碑記に刻まれた反乱の風説－方臘伝説の成立と拡大－、アジア遊学、第 91 号、pp.36～49、2006、査読無

〔学会発表〕（計 12 件）

① 須江　隆、「寧波を中心とした記録保存の社会文化史」研究に向けて－12 月国際ワークショップ・1 月国際シンポジウムの内容紹介と総括－、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」第 1 回「重点項目(イ)寧波を中心とした記録保存の

社会文化史」研究会、2009.1.31、信州大学人文学部

② 須江　隆、寧波とその周辺－地方文献に見える史料性･地域性･歴史性－(主催者、趣旨説明、司会者)、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」文献資料研究部門、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「墓より見た中国宋代の社会構造」主催 第4回国際シンポジウム、2009.1.10、東京大学文学部

③ 須江　隆、記録された言説と信仰－寧波の地方志と碑文を中心に－、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」文献資料研究部門、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「墓より見た中国宋代の社会構造」主催 国際シンポジウム「寧波とその周辺－地方文献に見える史料性･地域性･歴史性－、2009.1.10、東京大学文学部

④ 須江　隆、地方志における叙述活用の可能性－乾道『四明圖經』の史料性に関する二、三の考察を中心に－、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」文献資料研究部門･重点項目「寧波を中心とした記録保存の社会文化史」主催 国際ワークショップ「宋代社会文化史研究の方法論をめぐって」、2008.12.13、愛媛大学法文学部

⑤ SUE Takashi, Writing, Publishing, and Reading Local Histories in Song, Yuan, and Ming China（主催者・趣旨説明）, 文部科学省科学研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」文献資料研究部門 地方志･碑記班 第 4 回公開研究会, 2008.2.27, 広島大学大学院文学研究科

⑥ SUE Takashi, Rocks copied on Papers during Song-Qing era: Why were Stone Inscriptions Recorded in Local Gazetteers? , 38th International Congress of Asian and North African Studies, 12.9.2007, TOBB University of Economics and Technology, Turkey

⑦ 須江　隆、地方志・石刻史料研究－日本における宋代地域史料研究の現状と課題－、文部科学省科学研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」特別企画：にんぷろワークショップ 2007「日本宋史研究の現状と課題」、2007.7.21、九州大学西新プラザ

⑧ SUE Takashi, Revelations of a Missing Paragraph: Zhu Changwen and the Compilation of Local Gazetteers in the Northern Song, 59th Annual Meeting of Association for Asian Studies, 24.3.2007, Boston Marriott Copley Place, U.S.A.

⑨ 須江　隆、墓表と墓誌銘から読み解く ある北宋知識人の日常と生涯、科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」・基盤研究(B)(1)「墓より見た中国宋代の社会構造」主催 国際ワークショップ「墓･墓誌からみた宋代社会－家族･エリート･地域－」、2006.9.10、広島大学学士会館

⑩ 須江　隆、宋代石刻の史料的特質と研究手法、唐代史･宋代史合同研究会シンポジウム「石刻史料からみた唐宋元の社会と文化」、2006.8.2、ホテル信濃プリンスシラカバ

⑪ 須江　隆、中国における石刻史料の特徴と史料的意義、文部科学省科学研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」文献史料研究部門 地方志･碑記班 第1回公開研究会「歴史史料における石刻史料の意味と役割」、2006.3.16、財団法人東方学会

⑫ 須江　隆、歴史史料における石刻史料の意味と役割（主催者・趣旨説明)、文部科学省科学研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」文献史料研究部門 地方志･碑記班 第 1 回公開研究会、2006.3.16、財団法人東方学会

〔図書〕（計 3 件）

① 須江　隆（編著)、東大教材出版、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」文献資料研究部門主催 第4回国際シンポジウム「寧波とその周辺－地方文献に見える史料性・地域性・歴史性－」予稿集、2009、全178頁

② SUE Takashi, ed. Tateno Corporation, What Do Rocks and Papers Tell Us?: Building a New Theory of Chinese Local History Documents（38th ICANAS 2007 予稿集）, 2007, 全140頁

③ 須江　隆（編著)、勉誠出版、「特集 碑石は語る」『アジア遊学』第91号、2006、全192頁

６．研究組織

(1)研究代表者

須江　隆（SUE TAKASHI）

日本大学・生物資源科学部・准教授

研究者番号：90297797

(2)研究分担者

(3)連携研究者